



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	[展示]「新渡戸稲造の“homeport” 札幌時代」
Citation	北海道大学大学文書館年報, 9, 109-149
Issue Date	2014-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56499
Type	other
File Information	ARHUA9_006.pdf



< 展 示 >

「新渡戸稲造の“homeport” 札幌時代」

1. 資料見学会の企画・構成について

2013年9月17日、東京女子大学からのリトリート（修養旅行）「初代学長新渡戸稲造先生の足跡をたどって」に応じ、北海道大学大学文書館では資料見学会「新渡戸稲造の“homeport” 札幌時代」を、附属図書館玄関棟4階大会議室において開催した。資料見学会の構成は、新渡戸稲造が札幌農学校生として、また農学校教員として過ごした20年間を対象として、下記の7区分とした。

- | | |
|------------------|---------------|
| I. 札幌農学校までの道のり | II. 札幌農学校への入学 |
| III. 札幌農学校で学んだこと | IV. 母校の教壇へと歩む |
| V. 札幌農学校での仕事 | VI. 様々な活動 |
| VII. 札幌へのメッセージ | |

陳列資料・パネル（A3版）は、主に、大学文書館所蔵資料（文書・書簡・写真・受講ノート・学生日記・刊行物等）、附属図書館北方資料室所蔵資料（写真）・貴重資料室蔵書（札幌農学校文庫・佐藤昌介文庫・南鷹次郎文庫・内村鑑三文庫）、植物園所蔵資料（宮部金吾旧蔵写真）を用いた。陳列用大テーブル（100cm×200cm）7台を用いて1区分（1テーブル）毎に、パネル4枚を立て掛け、6～8個の資料を陳列した。

当日は、東京女子大学から眞田雅子学長をはじめ、1～4年生24名、引率教員6名、同窓会札幌支部の皆さん、計34名の参加があった。資料見学会の冒頭には、新田孝彦館長から歓迎の挨拶があり、眞田学長と新田館長との記念撮影を行った。資料見学会の進行は、展示の挨拶・構成・新渡戸稲造略年譜を掲載したリーフレット（B4版2つ折り）をもとに、館員によるガイドで一巡した後、自由見学とした。



展示風景



見学風景

2. 資料見学会の挨拶

大学文書館主催 資料見学会

新渡戸稲造の“homeport” 札幌時代

新渡戸稲造（1862-1933年）は、戦前期日本の代表的な知識人として著名ですが、その活動は実に多彩です。台湾総督府で技師・高官として日本の国策に深く関わるテクノクラートの側面、第一高等学校長や京都・東京両帝国大学教授そして東京女子大学初代学長として高等教育の質的・量的充実を目指す教育者の側面、国際連盟事務次長や国際会議議長を務める国際政治家としての側面、『武士道』に代表される著作で国外でも評価が高かった文化人としての側面などです。新渡戸がさまざまな分野で非常に大きな仕事を成し遂げたその原点は、青年・壮年期の20年間を過ごした札幌時代にあると言えます。

例えば、女性の教育の拡充に務めた教育者の側面に注目してみましょう。新渡戸は、札幌農学校第2期生として、外国人教師から英語学・英文学・キリスト教などを通して西洋の思想・文化を学びます。T.カーライルなど西洋最新の思潮に深く傾倒します。さらにアメリカなどへの留学で知見を広め、女性の教育そして社会における生き方について先進的な見解を持つようになります。そして、新渡戸は東京女子大学創設に参画するなど、培った思想を実行に移していきます。

また、こうした新渡戸の思想は、彼個人の中に止まらず、教え子たちにも大きく影響していきます。その代表は新渡戸の愛弟子である森本厚吉です。

森本は、新渡戸を校長に招き女子経済専門学校・東京文化学園（現在の新渡戸文化学園）を創設します。新渡戸はその思想の裾野が広く広がっていった点においても、近代日本において希有な存在でした。

今回の資料見学会「新渡戸稲造の“homeport” 札幌時代」は、新渡戸が札幌農学校生として、また農学校教員として過ごした20年間を資料で顧みる企画展示です。その思想を培い、行動へ移していく活力を養った札幌時代は、新渡戸にとって“homeport”であったと言えます。新渡戸が世界へ、さまざまなフィールドへと旅立つ、その“homeport”に彼の足跡を訪ね歩きたいと思います。



新渡戸稲造
(1902年、ベルリンにて)
(大学文書館蔵)

3. 陳列資料・パネル目録

I. 札幌農学校までの道のり	
I 期－パネル 1	共慣義塾と東京外国語学校（1875年）
古地図／『東京第四大区小区分絵図』1875年11月、国立国会図書館蔵、複製	
「協慣塾」が共慣義塾（湯島三組町3丁目）、「外国語学校」が東京外国語学校（一橋通1番地、現在は如水会館の辺り）である。	
I 期－資料 1	外国語学校統計表（1874年）
刊行物／『文部省年報 明治七年』、附属図書館蔵	
明治維新後、時代の要請から東京には多数の英学塾が設立された。初歩の手解きから、慶應義塾のように高等英語を教授する私塾まで、その教育内容は様々であった。太田稲造が英語を学んだ共慣義塾は、旧南部藩主が設立に関わった英学塾であった。後に総理大臣となる原敬もほぼ同時期にこの塾で学んでいる。	

I 期－資料 2	G. P. Quackenbos, “First Book in English Grammar” (1869年) G. P. Quackenbos, “An English Grammar” (1869年)
洋書／南鷹次郎文庫及び札幌農学校文庫、附属図書館貴重資料室蔵 G. P. クワッケンボスは、アメリカで文法・歴史・数学・物理など多分野にわたる学校教科書を執筆した。これらの教科書は日本で英学教科書や教養書として使用され、日本の西洋思想移入に大きな役割を果たした。稲造は共慣義塾で、クワッケンボスの文法書を学んだ。	
I 期－資料 3	F. Wayland, “The Elements of Moral Science” (1869年)
洋書／札幌農学校文庫、附属図書館貴重資料室蔵 稲造は、共慣義塾でF. ウェイランドの『道德科学』を英文原書で学んだ。この著書は当時、西洋倫理を学ぶ教科書として原書・翻訳書共に多用されたが、英語を学び始めたばかりの11歳の稲造には少々難しすぎたようである。	

I 期－パネル 2 東京英語学校 (1877年頃)

写真／ブルックス107、附属図書館北方資料室蔵

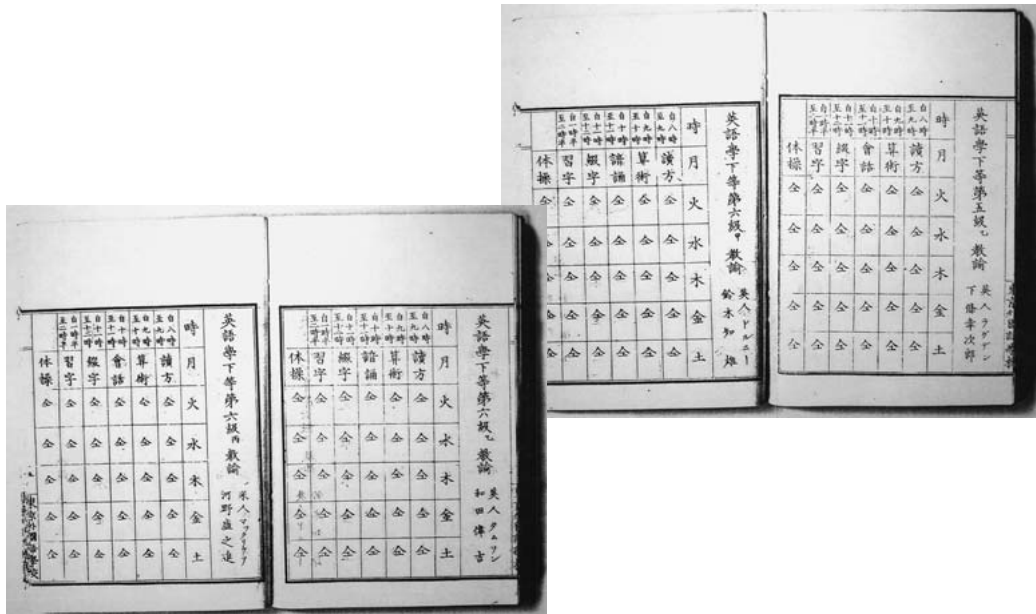
1874年12月、東京英語学校は東京外国語学校より分立し、「開成学校寄宿舎」(表神保町2番地)へと移転した。



I 期－資料 4 東京外国語学校第6級時間割 (1874年)

刊行物／『東京外国語学校官員並生徒一覧 明治七年』、附属図書館北方資料室蔵、複製

稲造は、1873年に東京外国語学校6級に入学した。読方、算術、暗誦、綴字などを学んでいる。稲造は後に札幌農学校で同期生となる内村鑑三、宮部金吾などこの学校で出会う。

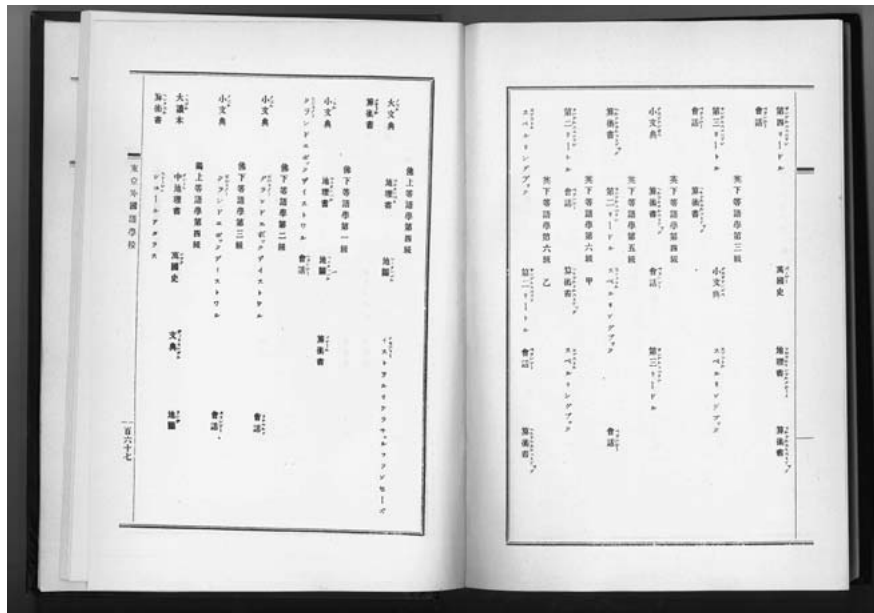


I 期一資料 5

東京外国語学校用書一覧 (1873年)

刊行物／『文部省年報 明治六年』、附属図書館蔵

稲造はこの学校でM. M. スコットに英語などを学び、その人柄に大きな影響を受けた。英文学に惹かれるきっかけともなる。

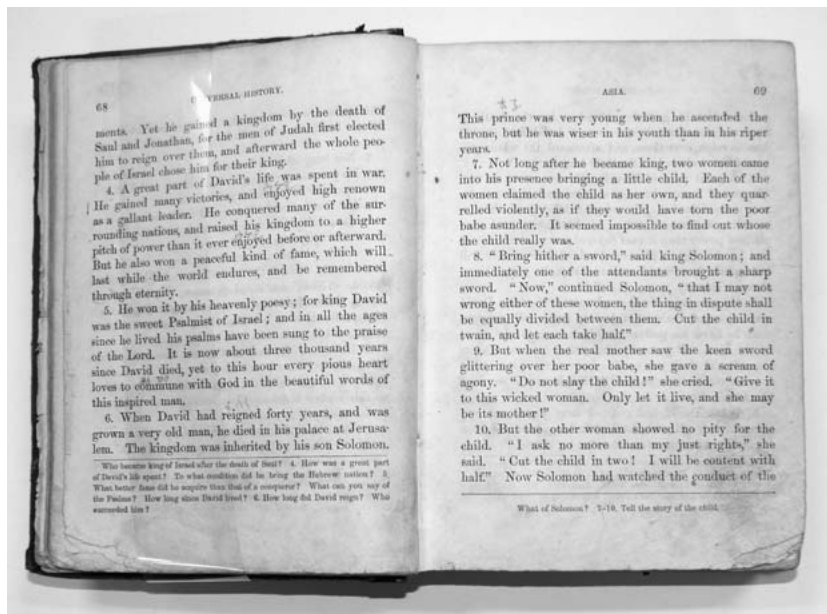


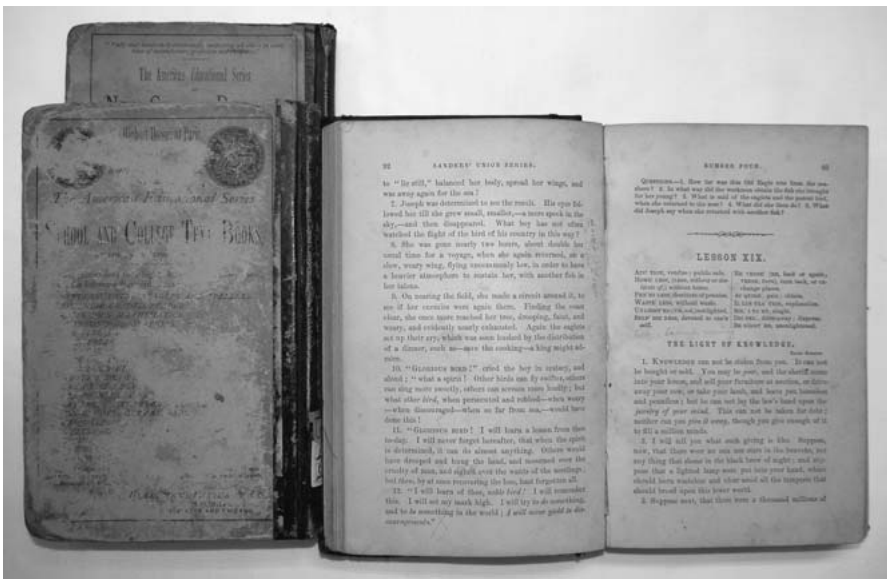
I 期一資料 6

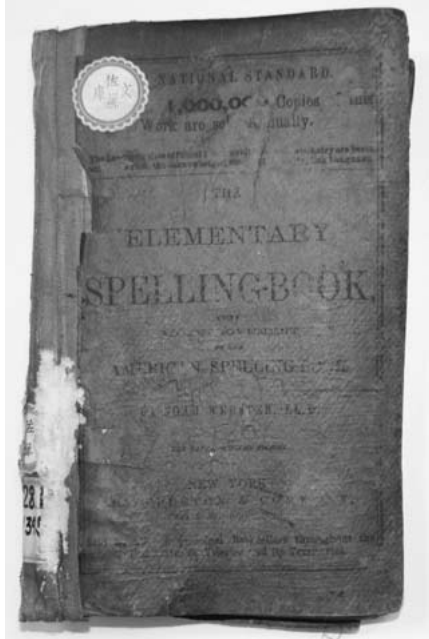
P. Parley, "Universal History, on the Basis of Geography" (1868年)

洋書／南鷹次郎文庫、附属図書館貴重資料室蔵

「パーレー万国史」として有名な本。日本では、学校での英語・歴史教科書として広く使用されると共に、教養人の必読書でもあった。東京外国語学校でも教科書として使用した。



I 期—パネル 3	やんちゃな稲造君——東京英語学校時代—— 佐藤 昌介（東京英語学校1876年卒業） （『新渡戸稲造全集』別巻・1987年・32-33頁より） 写真／北大百年047、附属図書館北方資料室蔵
新渡戸君の少年組は舎内に於て何か騒ぎを起せることあって、舎監の西村貞氏や清水彦五郎氏等にお目玉を頂戴して、養父の太田氏は大に心配して、ドウカ稲造を退舎させて君の処に一処に置いて呉れとの依頼ゆゑ、余も退舎して九段中坂の近処に下宿屋を探して余の同級生井原師義氏（後に大審院判事となる人）と三人で暫く下宿屋生活を為して英語学校に通学せる  佐藤 昌介	
I 期—資料 7	“Sanders' Union Reader” No 2 ～ 4 （1861-63年） 洋書／札幌農学校文庫、附属図書館貴重資料室蔵
当時の日本では、英語初歩の教科書として、アメリカの小学生用の教科書が用いられた。これらは「リードル」と呼ばれ、特にC.W. サンダーやM. ウィルソンが編纂したものが有名であった。稲造も「サンダーのリードル」で英語を学んだ。 	

I 期一資料 8	N. Webster, “The Elementary Spelling Books” (1866年)
洋書／佐藤昌介文庫、附属図書館貴重資料室蔵	
英語のスペリング入門書。東京外国語学校で教科書として使用した。	
	
I 期一パネル 4	東京英語学校在学の頃 (1876年)
写真／北大人物 B-19、附属図書館北方資料室蔵	
太田稲造 (中央) と同じ下宿であった井原師義 (左側) と佐藤昌介 (右側) は、1876年7月、東京英語学校を卒業した。翌月、佐藤昌介は札幌農学校へ第1期生として入学した。	
	

Ⅱ．札幌農学校への入学

Ⅱ期－パネル 5 芝増上寺内所在の開拓使仮学校（1875年）

古地図／『東京第二大区小区分絵図』1875年11月、国立国会図書館蔵、複製

1872年、開拓使は、東京芝増上寺内に、北海道開拓の技術者・指導者養成機関として「開拓使仮学校」を開校した。地図では「開拓使学舎」が開拓使仮学校を、「開拓使出張所」が開拓使東京出張所を、「工部寮」が「工部大学校」を指している。現在は、「黒本尊」辺りに東京タワー、「有栖川宮」辺りにＪＲ山手線浜松町駅がある。



Ⅱ期－パネル 6 開拓使仮学校校舎（1872年）

写真／北大百年014、附属図書館北方資料室蔵

開拓使は、いずれ札幌に移転することを計画していたことから「仮学校」と呼称し、その校舎には増上寺の「方丈」をあてた。在学生徒は、1873年4月時点で11～21歳の男子47名であった。



Ⅱ期一資料9

東京英語学校生徒月表 (1876年4月)

刊行物／札幌農学校簿書871所収、大学文書館蔵

札幌農学校開校に当たり、開拓使は稲造が在学した東京英語学校（東京外国語学校を改称）から生徒をスカウトした。赤線の生徒が第1期生として入学を希望した生徒。その他、稲造と共に第2期生として入学する内村鑑三、宮部金吾、佐久間信恭、毛受駒二郎、高木玉太郎、永井於菟彦、藤田九三郎、足立元太郎も在学していた。

表月徒生校學語英京東

四月 年九百八

第一級

第二級

第三級

第四級

第五級

第六級

第七級

第八級

第九級

第十級

第十一級

第十二級

第十三級

第十四級

第十五級

第十六級

第十七級

第十八級

第十九級

第二十級

第二十一級

第二十二級

第二十三級

第二十四級

第二十五級

第二十六級

第二十七級

第二十八級

第二十九級

第三十級

第三十一級

第三十二級

第三十三級

第三十四級

第三十五級

第三十六級

第三十七級

第三十八級

第三十九級

第四十級

第四十一級

第四十二級

第四十三級

第四十四級

第四十五級

第四十六級

第四十七級

第四十八級

第四十九級

第五十級

第五十一級

第五十二級

第五十三級

第五十四級

第五十五級

第五十六級

第五十七級

第五十八級

第五十九級

第六十級

第六十一級

第六十二級

第六十三級

第六十四級

第六十五級

第六十六級

第六十七級

第六十八級

第六十九級

第七十級

第七十一級

第七十二級

第七十三級

第七十四級

第七十五級

第七十六級

第七十七級

第七十八級

第七十九級

第八十級

第八十一級

第八十二級

第八十三級

第八十四級

第八十五級

第八十六級

第八十七級

第八十八級

第八十九級

第九十級

第九十一級

第九十二級

第九十三級

第九十四級

第九十五級

第九十六級

第九十七級

第九十八級

第九十九級

第一百級

第一百零一級

第一百零二級

第一百零三級

第一百零四級

第一百零五級

第一百零六級

第一百零七級

第一百零八級

第一百零九級

第一百一十級

第一百一十一級

第一百一十二級

第一百一十三級

第一百一十四級

第一百一十五級

第一百一十六級

第一百一十七級

第一百一十八級

第一百一十九級

第一百二十級

第一百二十一級

第一百二十二級

第一百二十三級

第一百二十四級

第一百二十五級

第一百二十六級

第一百二十七級

第一百二十八級

第一百二十九級

第一百三十級

第一百三十一級

第一百三十二級

第一百三十三級

第一百三十四級

第一百三十五級

第一百三十六級

第一百三十七級

第一百三十八級

第一百三十九級

第一百四十級

第一百四十一級

第一百四十二級

第一百四十三級

第一百四十四級

第一百四十五級

第一百四十六級

第一百四十七級

第一百四十八級

第一百四十九級

第一百五十級

第一百五十一級

第一百五十二級

第一百五十三級

第一百五十四級

第一百五十五級

第一百五十六級

第一百五十七級

第一百五十八級

第一百五十九級

第一百六十級

第一百六十一級

第一百六十二級

第一百六十三級

第一百六十四級

第一百六十五級

第一百六十六級

第一百六十七級

第一百六十八級

第一百六十九級

第一百七十級

第一百七十一級

第一百七十二級

第一百七十三級

第一百七十四級

第一百七十五級

第一百七十六級

第一百七十七級

第一百七十八級

第一百七十九級

第一百八十級

第一百八十一級

第一百八十二級

第一百八十三級

第一百八十四級

第一百八十五級

第一百八十六級

第一百八十七級

第一百八十八級

第一百八十九級

第一百九十級

第一百九十一級

第一百九十二級

第一百九十三級

第一百九十四級

第一百九十五級

第一百九十六級

第一百九十七級

第一百九十八級

第一百九十九級

第二百級

宮部金吾

札幌農学校

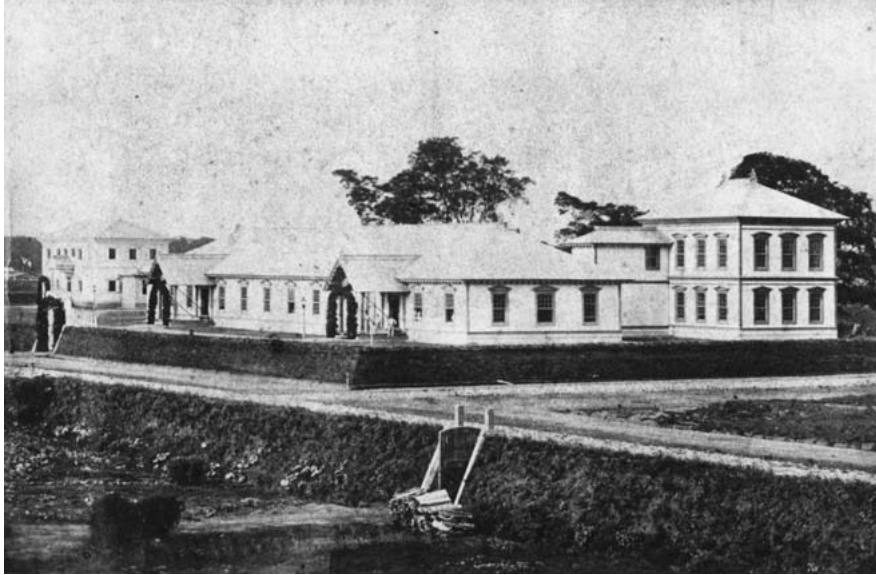
出波中思大内内柳松
回水客島内内本夜
多海客西西橋通昌
多海客西西橋通昌

Ⅱ期－パネル 7

開校当日の札幌農学校（1876年 8 月14日）

写真／北大百年030、附属図書館北方資料室蔵

1876年に札幌農学校として発足したキャンパスは、現在の札幌市中央区北1～2条、西1～2丁目あたりを占めていた。校舎は、外国人宿舎を移築した講堂（左）、寄宿所（中央）の2棟のみであり、開拓使本庁の東側に位置した。

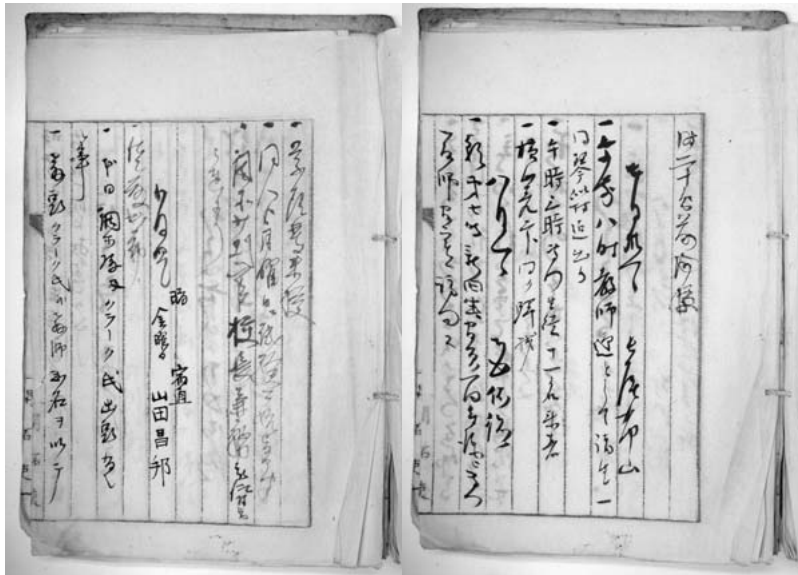


Ⅱ期－資料10

当直日誌（1876年）

文書／札幌農学校簿書044、大学文書館蔵

札幌農学校の当直日誌には、1876年7月31日の項に「午前八時教師迎として諸生一同琴似村迄出ツ」「午時三時専門生徒十一名来着」と、W. S. クラークら教師と東京でスカウトした生徒の到着を記載している。8月4日の項には「クラーク氏出頭有之」と農学校への出校の記載がある。



Ⅱ期一資料11

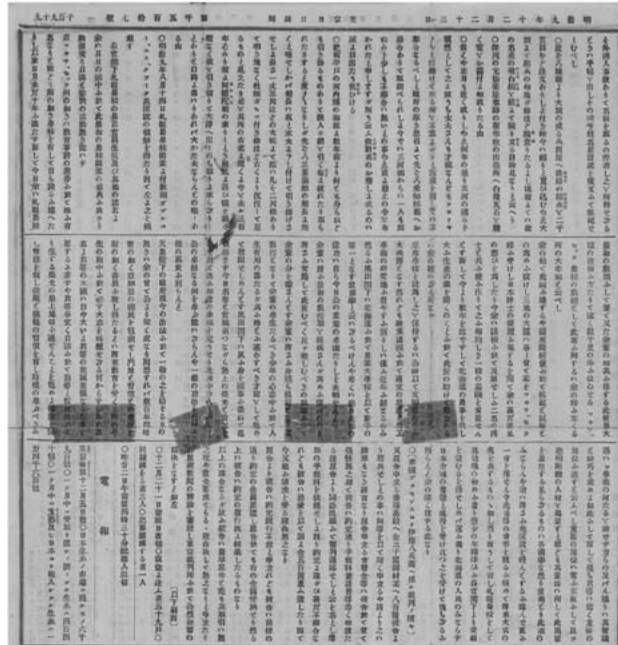
札幌農学校開校式を伝える『東京日日新聞』(1876年12月23日)

新聞、写真／大学文書館蔵

札幌農学校の開校を伝え、W. S. クラークの演説を掲載している。



W. S. Clark

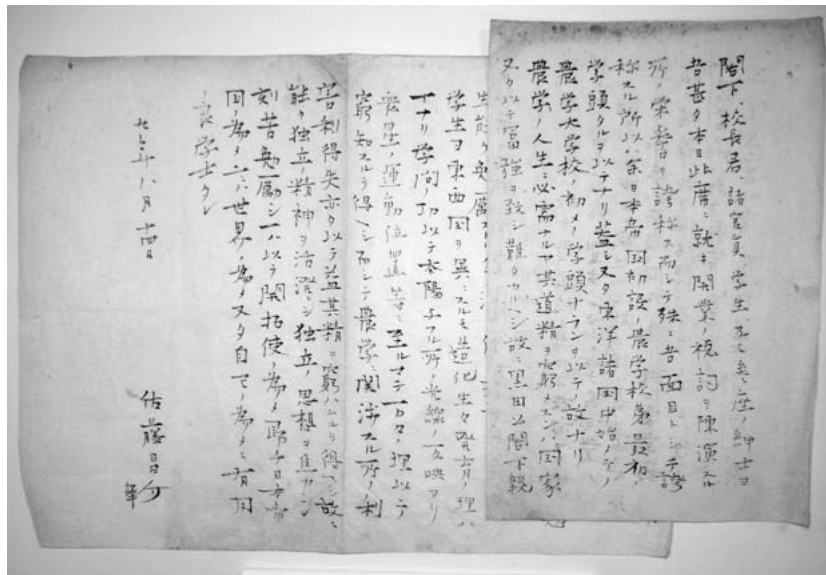


Ⅱ期一資料12

札幌農学校開校式におけるW. S. クラーク演説 (1876年8月14日)

文書／札幌農学校簿書047-5、大学文書館蔵

札幌農学校開校式におけるW. S. クラークの演説を第1期生佐藤昌介が和訳した原稿。入学生に向けて「能ク独立ノ精神ヲ活潑ニシテ独立ノ思想ヲ焦カシ刻苦勉勵シテハ以テ開拓ノ為メ即チ日本帝國ノ為メニハ世界ノ為メ又タ自己ノ為メニ有用ノ良学士タレ」と呼びかけた。



Ⅱ期一資料13

大学予備門生徒転学許可依頼（1877年5月5日）

文書／札幌農学校簿書051、大学文書館蔵

第2期生についても優秀な生徒を確保するため東京英語学校（大学予備門と改称）からスカウトするべきとのW. S. クラークの進言に基づき、開拓使は文部省へ大学予備門生徒の譲り受けを依頼した。

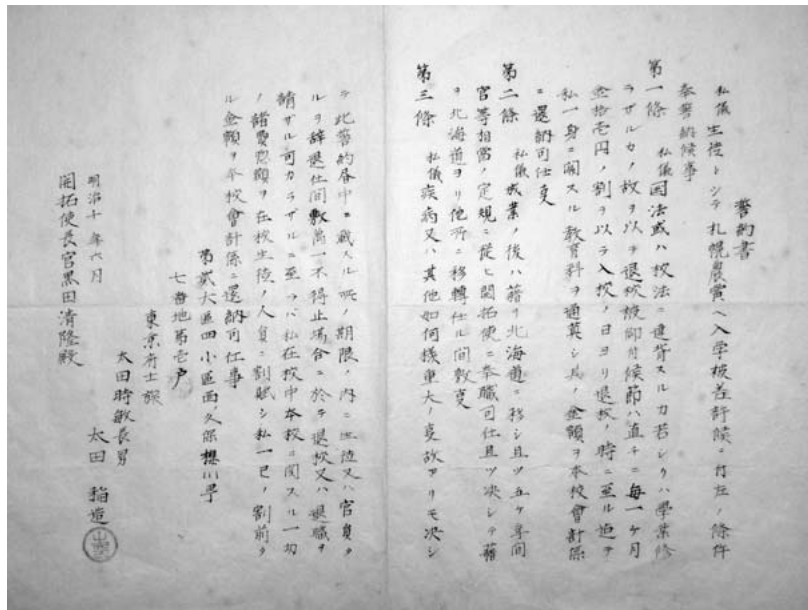


Ⅱ期一資料14

太田稲造が札幌農学校入学に際して提出した「誓約書」（1877年6月）

文書／札幌農学校簿書062-3、大学文書館蔵

東京でのスカウトの結果、7月2日に大学予備門、工部大学校などから19名が札幌農学校第2期生として入学することが決まった。大学予備門からの入学は稲造ら12名であった。



Ⅱ期一パネル8

演武場開業式 (1878年10月16日)

写真／北大百年053、附属図書館北方資料室蔵

農学本館を兼ねた演武場は、外国人教師W. ホーラーの設計に拠る。中央椅子に座るのは調所廣丈校長、左側の生徒たちが後の第1～3期生。



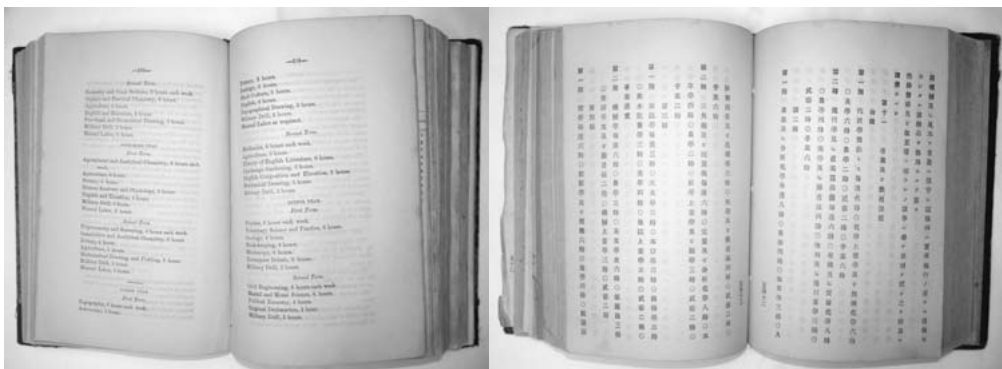
Ⅲ. 札幌農学校で学んだこと

Ⅲ期一資料15

札幌農学校カリキュラム (1877年)

刊行物／『札幌農学校第二年报』英文・和文、大学文書館蔵

農学のみではなく関連する科学全般に加え、英学関係科目が充実し、人文科目も含み、さらに弁舌法 (Elocution: 弁論術)、武芸 (Military Drill: 教練)、手業 (Manual Labor: 実習) などで構成された特徴的なカリキュラムであった。

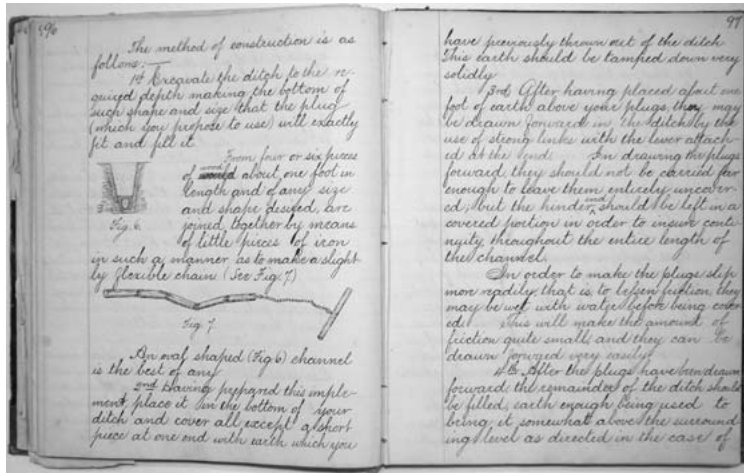


Ⅲ期－資料16

W. P. ブルックス講義「農学 1」（太田稲造受講ノート、1877-1878年）

ノート／受講ノート0017、大学文書館蔵
写真／ブルックス047、附属図書館北方資料室蔵

稲造が1年生で学んだW. P. ブルックスの農学講義を記録したノート。農地形成のための土管を使用した排水技術についての講義。



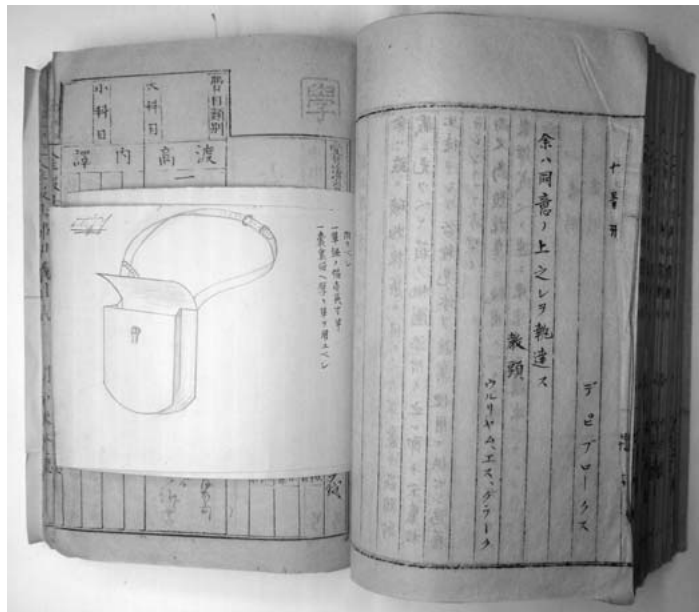
W. P. Brooks

Ⅲ期－資料17

背負紐付革バッグの注文書（1877年4月24日）

文書／札幌農学校簿書054、大学文書館蔵

農学校は標本採集用バッグを生徒のために注文した。農学校生は札幌郊外で植物・鉱物などの採集を行なった。

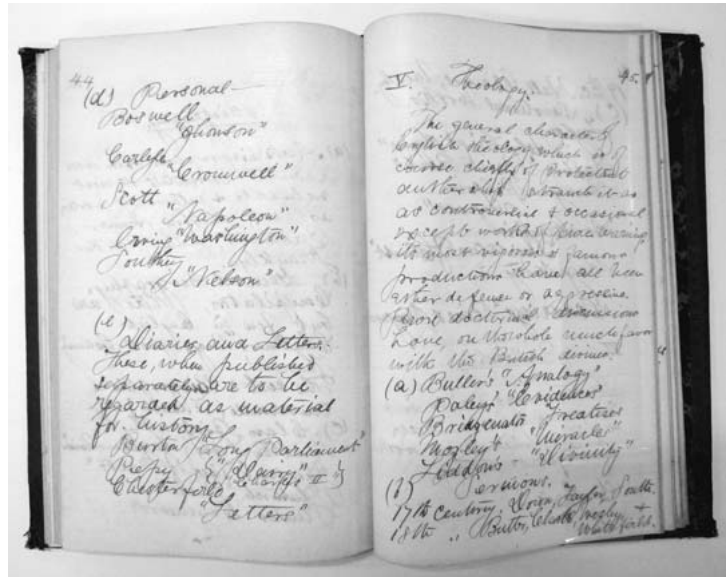


Ⅲ期一資料18 J. C. カッター講義「英文学」(池田鷹次郎受講ノート、1879-1880年)

ノート／受講ノート0016、大学文書館蔵 写真／ブルックス095、附属図書館北方資料室蔵
稲造の同期生であった池田鷹次郎(南鷹次郎)が記録したJ. C. カッターの英文学講義のノート。
T. Carlyle, "Cromwell"を取り上げている。



J. C. Cutter



Ⅲ期一パネル9 札幌農学校3年級在学の頃(1880年10月28日)

写真／宮部金吾旧蔵写真0474-01、植物園蔵

後列左より、廣井勇、藤田九三郎、宮部金吾、足立元太郎
前列左より、太田稲造、内村鑑三、佐久間信恭、高木玉太郎



Ⅲ期－パネル10

「モンク」となった稲造君——札幌農学校在学時代——
宮部 金吾（札幌農学校第2期生）

（『新渡戸稲造全集』別巻・1987年・12頁より）
写真／北大人物B-20、附属図書館北方資料室蔵

英語の力に於ては級中誰一人君に及ぶ者なく嶄然として頭角を露はしてゐました。常に読書に耽けりまして学校の図書館所蔵の英書中文学、伝記、宗教等に関するものは悉く読破せられたものであります。……入学当時、君は頗る快活で思慮分別に富み歳に似合はずませた処がありました……所が卒業前一二年の頃より多読の結果思想に動揺を來たし殊に神学上の懷疑に陥り憂鬱な人となつてしまひました。同級生はそこで君を呼んで「モンク」と綽名したのであります。

新渡戸稲造（1879年）

Ⅲ期－資料19

T. Carlyle, “Sartor Resartus” (1893年)
洋書／内村鑑三文庫・札幌農学校文庫、附属図書館貴重資料室蔵

新しい時代の人間性を説いたT.カーライル『サータ・レザータス』（衣裳哲学）は、当時、多くの日本人青年を魅了した。稲造もその一人。農学校には後にサータ・レザータス研究会（カーライル研究会）が発会する。

Ⅲ期一資料20

定期試験表 (1877年12月)

文書／札幌農学校簿書069-1、大学文書館蔵

稲造ら第2期生が2年級時の成績表。仲のよい稲造と内村鑑三、宮部金吾が好成績を競っている。農学と英語学の点数は稲造がトップである。

Ⅲ期一パネル11

カッター先生、学問深かりし

新渡戸 稲造 (札幌農学校第2期生)

(『蕙林』第15号・1895年・49-50頁より)

写真／北大百年040、附属図書館北方資料室蔵

先生の頭は長く、額広くして高く、円形を為し、一目してその記憶力に富めるを現はしたる程にて、一読せし物は先づ忘れじと云ふ故に、如何ばかりこの人の学問は深かりしかは知らねど、教場或は校外にて談話すれば、政治、文学、農業、歴史等に至るまで何一つ直答せぬ事とはなく、学生中にも善い加減に胡麻化〔誤魔化〕しはせぬかと疑ふものもありけり。……英文学の講義を聴きし時も、余りに滔々と弁ずる故、若しや法螺にはあらぬかと帰舎して検せしことも有りしに、別に先生の失敗を発見すること能はざりき。



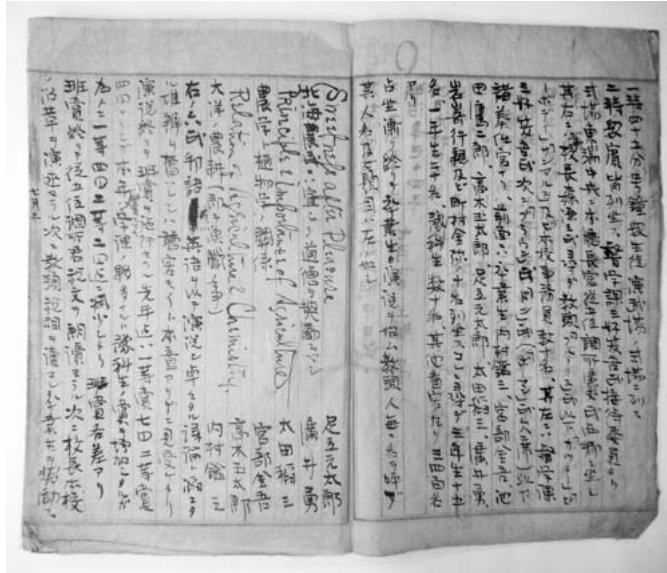
米国人教師とその夫人たち (1879年)

Ⅲ期一資料21

志賀重昂日記（1881年）

日記／大学文書館蔵

稲造の後輩、第4期生志賀重昂は、1881年7月9日の日記で第2期生の卒業式の様子を詳述している。稲造は“Principle & Importance of Agriculture”（農業の重要性）というテーマで英語演説を行なった。

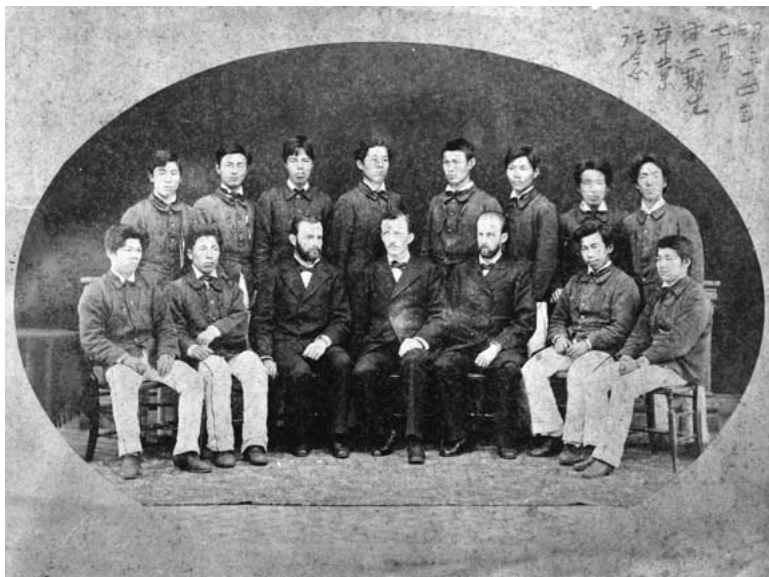


Ⅲ期一パネル12

札幌農学校第2期生卒業記念（1881年）

写真／北大百年050、附属図書館北方資料室蔵

後列左より、足立元太郎、太田稲造、内村鑑三、鶴崎（村岡）条一、藤田九三郎、南鷹次郎、廣井勇、岩崎行親。前列左より、町村金弥、諏訪鹿三、ピーボディ、ブルックス、カッター、宮部金吾、高木玉太郎。



IV. 母校の教壇へと歩む

IV期一資料22

開拓使御用係申付 (1881年7月21日)

文書／札幌農学校簿書109、大学文書館蔵
写真／A(b) 66、附属図書館北方資料室蔵

札幌農学校卒業生は開拓使への奉職が義務づけられていた。稲造は勸業係配属となった。バッタの駆除、甜菜の製糖法、農学校予科の英語授業などに当たった。一方で事務机の上にはT.カーライルの著書を置いていた。開拓使は1882年1月に廃止となり、奉職義務が解かれる。



開拓使本庁舎 (1877年頃)



IV期一パネル13

東京大学在学中の新渡戸稲造 (1883年)

写真／大島 1 (10)、附属図書館北方資料室蔵

1883年8月農商務省御用係を辞した稲造は、翌月より経済学、統計学、英文学等を修業のため、東京大学へ通い始めた。

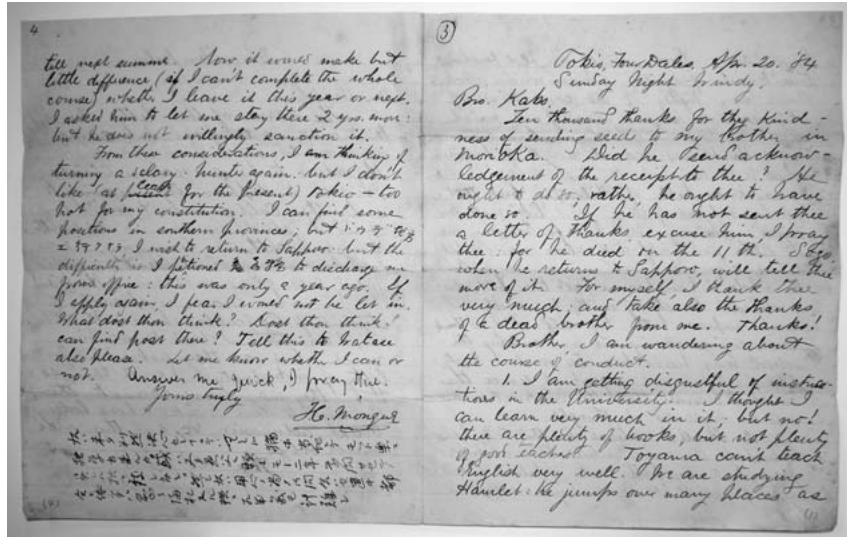


Ⅳ期一資料23

東京大学での学生生活（1884年4月20日付、宮部金吾宛て書簡）

書簡／宮部金吾旧蔵書簡〔新渡戸003〕、大学文書館蔵

東京大学の英文学講義では、札幌農学校で熟読した『ハムレット』が取り上げられているが、「難しいと見れば、ページを飛ばしてしまう」という有様で、稲造の知識欲を満足させるものではなかった。稲造は、「I am getting disgustful of instructions in the University. I thought I can learn very much in it, but no!」と落胆している。

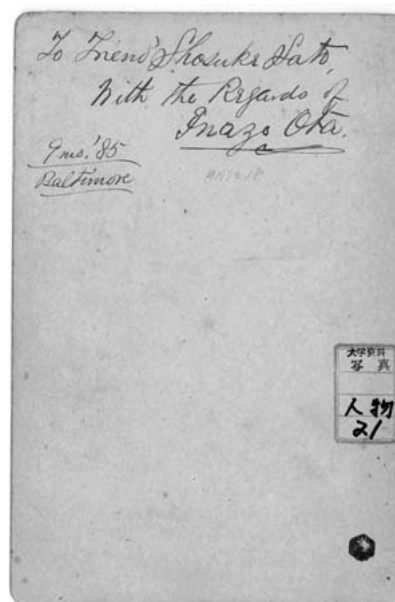


Ⅳ期一パネル14

ジョンズ・ホプキンス大学留学中の新渡戸稲造（1885年）

写真／北大人物B-21、附属図書館北方資料室蔵

写真裏には、「To Friend Shosuke Sato, with the Regards of Inazo Ota.」と、第1期卒業生で稲造と同郷の佐藤昌介への献辞が書き込まれている。



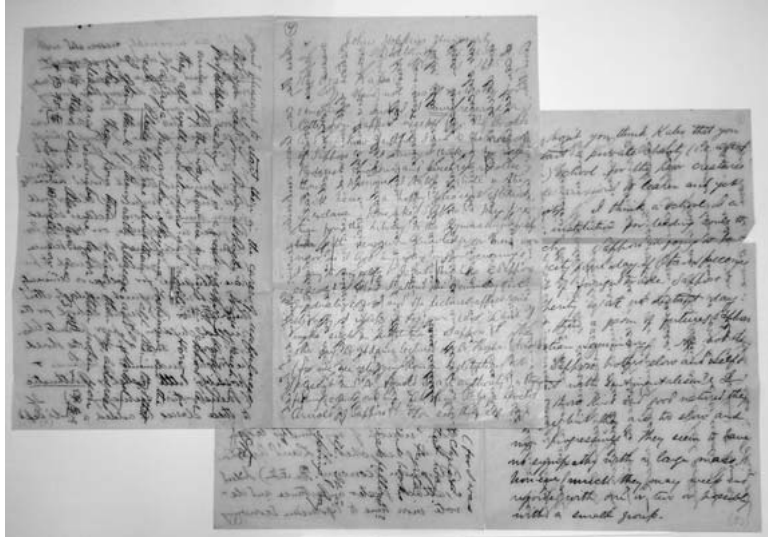
Ⅳ期一資料24

ジョンズ・ホプキンス大学での学生生活(1885年11月13日付、宮部金吾宛て書簡)

書簡／宮部金吾旧蔵書簡〔新渡戸009〕、大学文書館蔵

ジョンズ・ホプキンス大学での「セミナー（すなわち“大学院の演習科”）」に深く感銘を受け、札幌農学校でも採用できないだろうか、稲造はアメリカにおける最新の研究制度を伝えている。

When I attend the Seminary [Seminar] (i.e. graduate course and the lectures affect me) eternally, I whisper to my own ears, Can't I make such an institution in Sapporo?

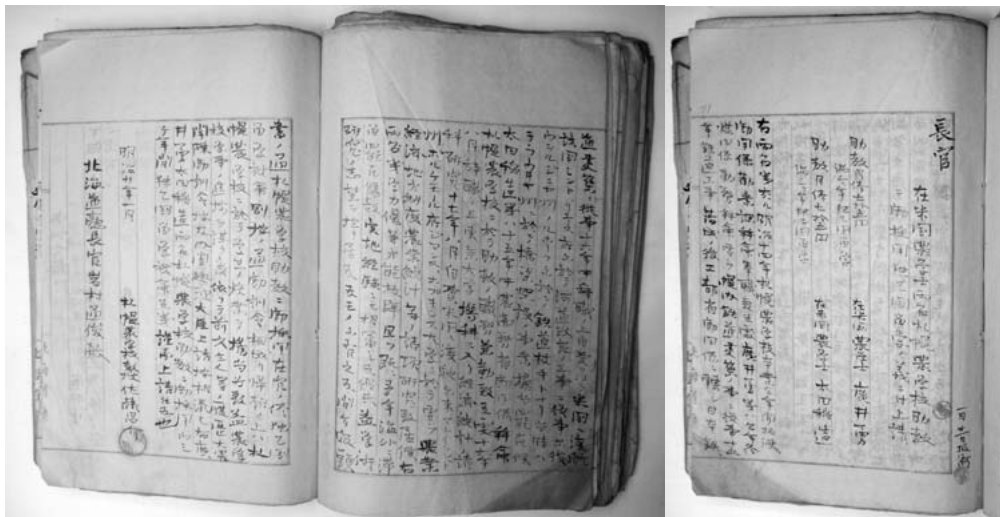


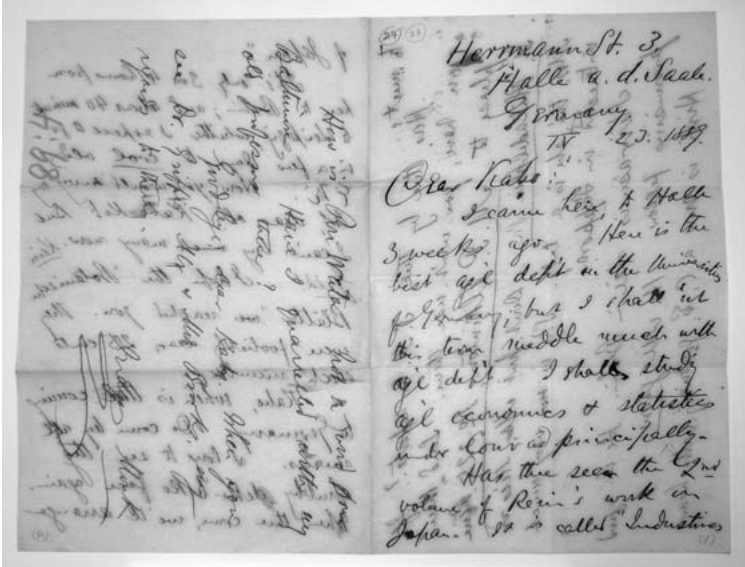
Ⅳ期一資料25

太田稲造・廣井勇留学上請（1887年1月）

文書／札幌農学校簿書271、大学文書館蔵

佐藤昌介は、ジョンズ・ホプキンス大学での留学を終え、1886年12月より札幌農学校教授として学校経営に当たった。佐藤は稲造を農政学の教授とするため、ドイツ留学をさせるよう北海道庁長官に上申した。



IV期－パネル15	新渡戸君の学資を調達せねば！ 佐藤 昌介（札幌農学校第1期生・教授）
（『新渡戸稲造全集』別巻・1987年・34-35頁より） 写真／北大人物B-23、附属図書館北方資料室蔵	
余は直に書を飛ばして、ボルチモールに來り共に勉強することを勧めたのであった。新渡戸君直に之に応じ旬日を経ずして余の寓居尋ね來られたが、新渡戸君も余も元より学資には豊かではない……部屋は余と一處で、食事は近所の安下宿屋に行き、大学の授業料はアダムス先生の仕事を手伝ってその料金で支弁すると云ふ苦しき学生生活を共に続けたのであった。……余は帰朝後急に何事も措いて着手せるは新渡戸君の学資の問題であった。そは幾ら儉約しても新渡戸君の学資はクリスマス頃迄続かない。 ボルチモアにて（1886年） 左より、新渡戸稲造、元良勇次郎、長瀬鳳輔、佐藤昌介	
IV期－資料26	ハレ大学での学生生活（1889年4月23日付、宮部金吾宛て書簡）
書簡／宮部金吾旧蔵書簡〔新渡戸023〕、大学文書館蔵	
ハレ大学に留学した稲造は、コンラッド教授の下で農業経済学・統計学の研究に専心した。同じく海外留学中の宮部金吾との再会を心待ちにしていた稲造は、「デコボコの顔“deko-boko face”を見るのが待ち遠しい」と記している。	
	

IV期－パネル16	新渡戸式ドイツ語学修法 高岡 熊雄 (札幌農学校第13期生)
(『新渡戸稲造全集』別巻・1987年・73頁より) 写真／北大人物B-26、附属図書館北方資料室蔵 先生は始終話して居るのが発音に熟達するのに最もよい方法であると言われました。先生は前にボン大学に留学せられた折、独逸語を学修されたのですが、其の当時、先生は毎日二十なり三十の単語を書いた紙片をポケットにお持ちになり、街を散歩などなさる時にも之を暗誦する様に努められたさうであります。郵便切手を買ふにも必要なだけ一枚宛買って来られました。何故そんなことをせられたかと申しますと、兎に角切手を買ふにも饒舌らなければ買へません。其の饒舌る独逸語を習得するために斯様なことをせられたと言ふ事であります。  新渡戸稲造・メアリー夫妻 (1891年頃)	
IV期－資料27	札幌農学校教授叙任 (1891年3月6日) 文書／札幌農学校簿書433、大学文書館蔵
卒業後、東京・アメリカ・ドイツで勉強に励み、帰国した稲造は、1891年3月31日付けで札幌農学校教授となった。札幌農学校幹事になっていた佐藤昌介の尽力の結果であった。佐藤は同年8月には校長心得、1894年4月には校長となった。  	

V. 札幌農学校での仕事	
V期－パネル17	母校在職中の新渡戸君 南 鷹次郎（札幌農学校第2期生・教授） （『新渡戸稲造全集』別巻・1987年・65頁より） 写真／南鷹次郎旧蔵資料、大学文書館蔵
	新渡戸君は、明治二十四年春、独逸より帰朝するや直に母校の教授に任命せられ教壇に立つ事になり、農政学、植民学、農史、農業本論、経済学等の専門諸学科を受持ち、此外英文学と独逸語をも教へて居た。欧米遊学中に研鑽蘊蓄したる新知識を以て元氣克く巧に教授指導したる為め、学生等は愉快に修学し、殊に君の人格は自から其間に表はれ、感化の及ぶ所大なるものがあつた……それから予科の英語及倫理を担当し、得意の「カーライル」を講じ生徒達の精神的薰陶に力を尽した。 南鷹次郎教授
V期－資料28	農学科カリキュラム改正案（1891年5月4日） 文書／札幌農学校簿書892、大学文書館蔵 稲造は農学科カリキュラムの改正委員を務めた。専門科目を学ぶ農学科のカリキュラムの当初案に鉛筆書きで「英文学」を加えたのは稲造の意向だろう。稲造（「N」印）は英文学、独逸語、経済学、農業史、農政及統計学を担当することになっている。

V期一パネル18

札幌農学校第9期生卒業記念 (1891年7月)

写真／宮部金吾旧蔵写真0474-03、植物園蔵

稲造が教授として初めて参列した卒業式。前列は、校長と本科（農学科・工学科）担当の教授たち。左より、吉井豊造、南鷹次郎、廣井勇、佐藤昌介、橋口文蔵校長、宮部金吾、新渡戸稲造、須藤義衛門、大島正健。吉井・須藤以外の教授は、札幌農学校1～2期生が占めていた。

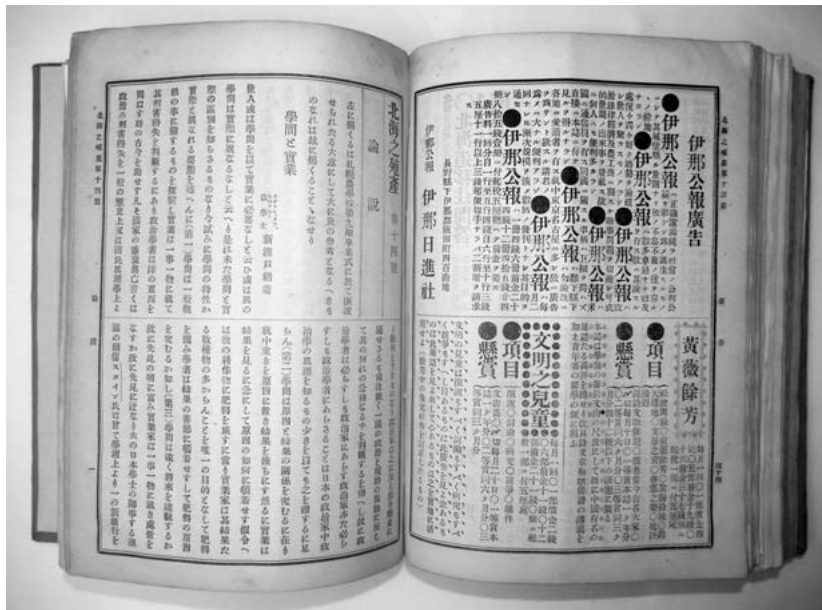


V期一資料29

第9期生卒業式での新渡戸教授演説 (1891年7月)

刊行物／『北海之殖産』第14号、附属図書館蔵

「学問と実業」と題して、農業という実業で事を為すには学問の学理が不可欠であることを力説している。以降、卒業式では稲造が教授陣を代表して卒業生に寄せる演説を行なった。



V 期一パネル19

札幌農学校第11期生卒業記念（1893年 7 月）

写真／宮部金吾旧蔵写真0474-04、植物園蔵

第11期生卒業式の後、米国人教師 A. A. ブリガム（農学担当）が突然解雇となり、札幌農学校は開校以来、はじめて外国人教師（御雇外国人）が皆無となった。

前列左より、吉井豊造、南鷹次郎、宮部金吾、佐藤昌介、ブリガム、新渡戸稲造、大島正健。

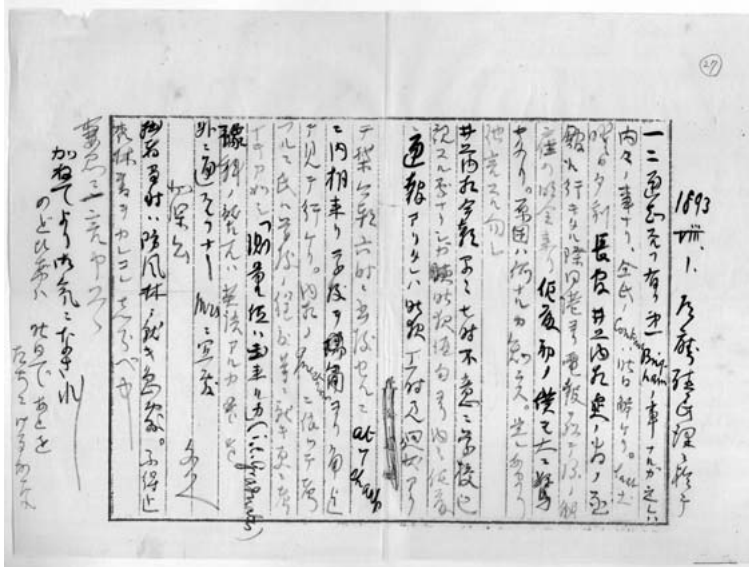


V 期一資料30

札幌農学校の遭難（1893年 8 月 1 日付け、宮部金吾宛て書簡）

書簡／宮部金吾旧蔵書簡〔新渡戸027〕、大学文書館蔵

稲造は御雇外国人教師 A. A. ブリガムの突然解雇や、井上毅文部大臣の視察が不意に行われたことなど、不在中の宮部に伝えている。これ以降、札幌農学校が、高等専門教育機関のまま、北海道庁から文部省へ所管を移行する道は険しいものとなる。



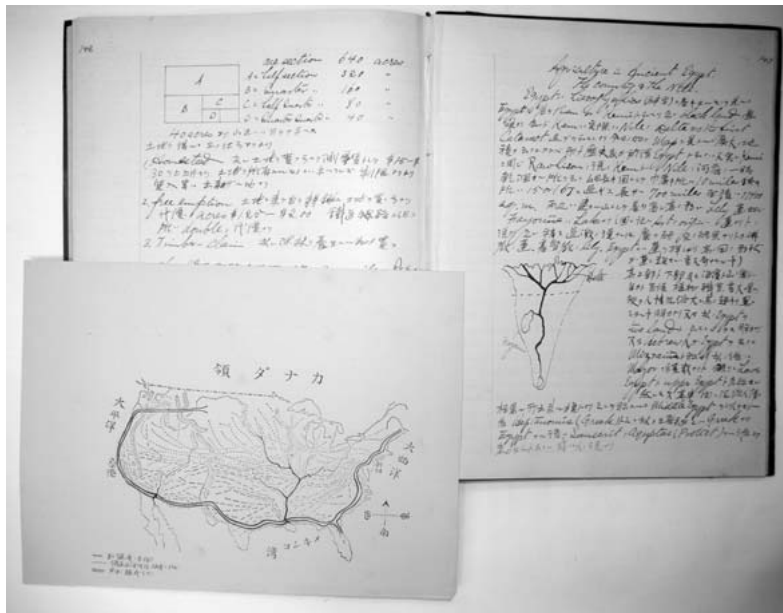
V期一資料31	ゼミナール新設の提案 (1893年2月22日、教官会議)
文書／札幌農学校簿書469、大学文書館蔵	
稲造は宮部、南と共に、教官会議においてゼミナール（講座）新設を提案した。6つの専門部（ゼミナール）を置き、「前二年ハ各部共ニ均ク普通農学ノ全般ヲ教授シ後二年ニ学生ヲシテ六部中随意ニ一科ヲ撰ハシメ之ヲ専心攻究セシムル」という制度であった。農学校では1894年からゼミナールを導入する。	
	
V期一パネル20	農業経済学ゼミナール（教室）はじまりの頃（1895年4月）
写真／高岡熊雄関係資料、大学文書館蔵	
農業経済学を専攻した最初の学生たち（後の13～14期生）と共に。農業経済学ゼミナールの担当教授は、佐藤昌介（前列左）と新渡戸稲造（前列右）。	
	

V期一資料32

新渡戸稲造講義「農業史」(湯地定彦受講ノート、1894-1895年)

ノート／受講ノート150、大学文書館蔵

稲造は「農業史」の講義でエジプトやギリシャの古代農業に始まり、近代植民史へと至る内容を論じている。第16期生湯地定彦が筆写したノート。

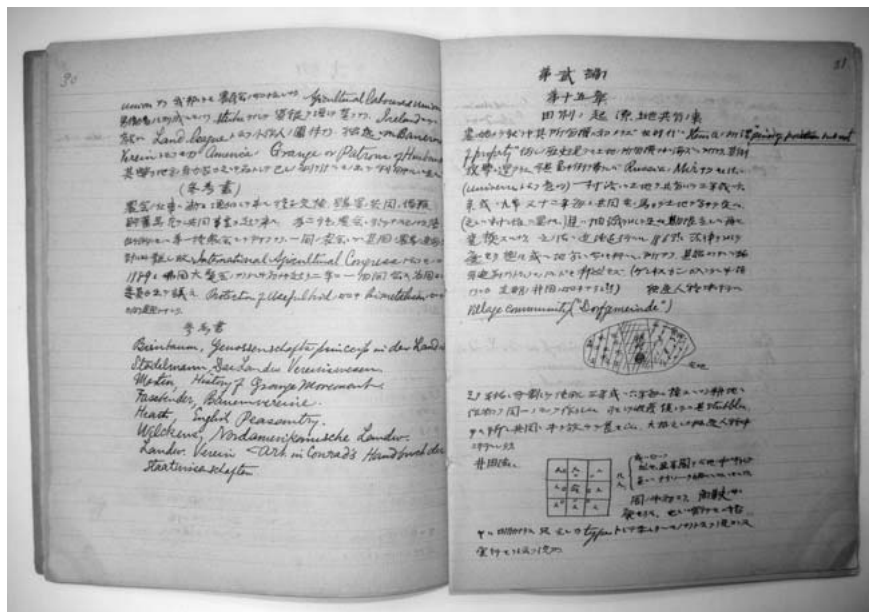


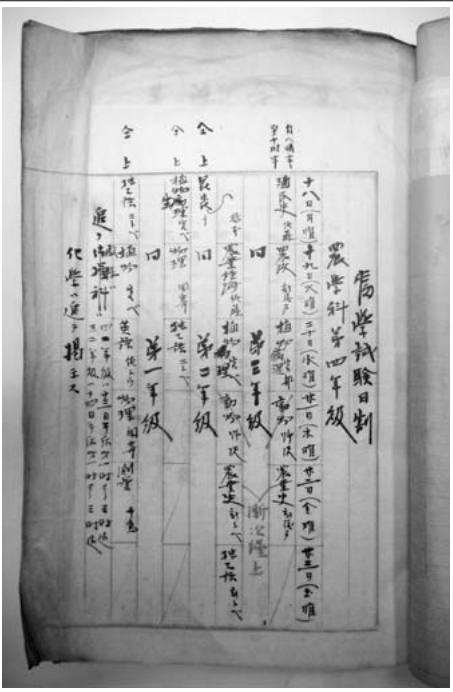
V期一資料33

新渡戸稲造講義「農政学」(平塚直治受講ノート、1895-1896年)

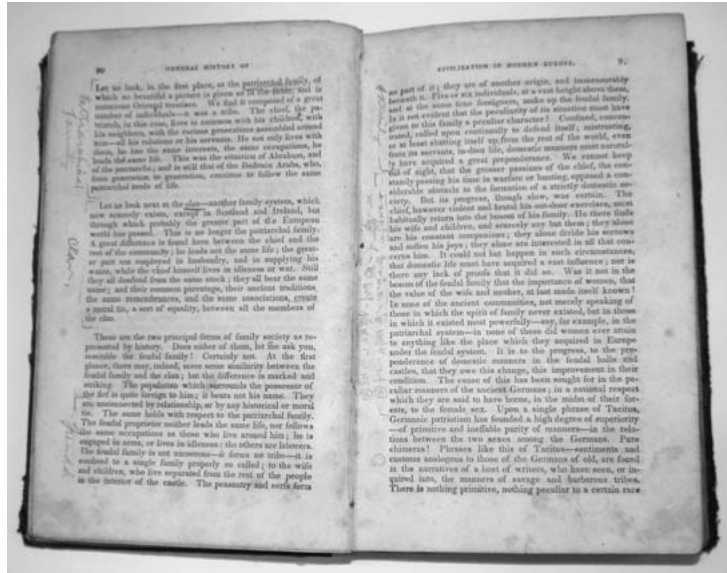
ノート／受講ノート148、大学文書館蔵

稲造は「農政学」の講義で古今東西の農業政策・農業制度を論じている。第14期生平塚直治が筆写したノート。

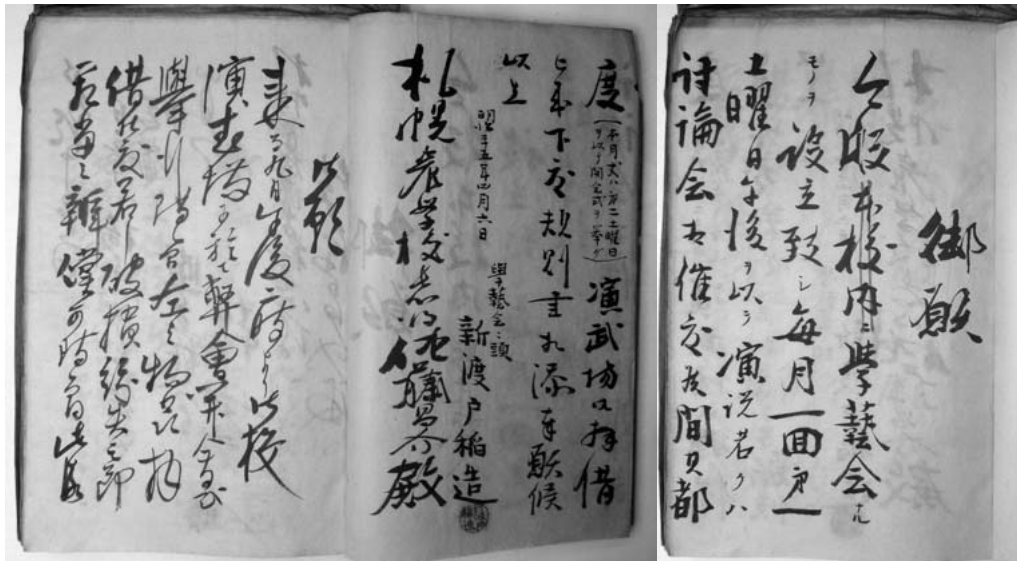


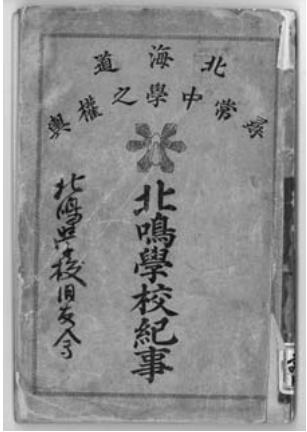
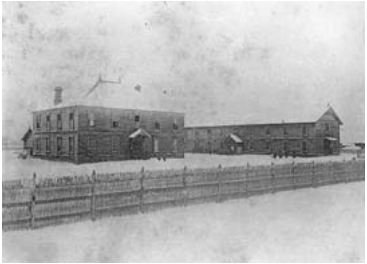
V期一資料34	農学科前期試験時間割 (1893年12月12日)
文書／札幌農学校簿書906、大学文書館蔵	
稲造は農政学、農業史、ドイツ語を担当していた。	
VI. 様々な活動	
VI期一パネル21	ギゾー『文明史』で、女性の地位向上を!? 新渡戸 稲造 (札幌農学校第2期生・教授)
(1893年2月19日付けエルキントン家宛て新渡戸書簡、『新渡戸稲造全集』第22巻・1986年・444-445頁より) 写真／高岡熊雄関係資料、大学文書館蔵	
今学期は予科で五時間、主として歴史をやっています。一年生にはギゾーの『文明史』を使っています。これはあらゆる主題について「論じる」非常に多くの場を提供してくれます。封建制度の章では、四つか五つの質問をするのに三週間かかりました(授業は一週一回ですから三時間ということです)。その章では、と言うよりその講義で婦人の地位に触れたことで、女性の地位向上全般についての討論へと展開されていきました。そのようにして私たちの授業は話し合いの時間になってきました。	 第14・15期生と共に (1896年)

VI期一資料35	M. Guizot, “General History of Civilization in Europe” (1868年)
洋書／星野勇三関係資料、大学文書館蔵	
ギゾー『文明史』は知識人の必読書であった。稲造は予科の講義でテキストとして使用した。本資料は教え子星野勇三（第19期生）の旧蔵書。稲造の英文学、歴史学の講義は予科生徒に大きな影響を及ぼした。	



VI期一資料36	学藝会の発会（1892年4月9日）
文書／札幌農学校簿書901、大学文書館蔵	
学藝会は主に演説会や討論会を開催する課外サークルとして発足し、稲造が初代会頭を務めた。学藝会を中心に農学校では文芸活動が盛んになる。後に学友会的組織である「文武会」へと発展していく。	



VI期－パネル22	北鳴学校の新渡戸教頭 小谷 武治（北鳴学校元生徒・札幌農学校第15期生）
（『新渡戸稲造全集』別巻・1987年・82頁より） 写真／星野勇三関係資料、大学文書館蔵	
毎週全校生徒に修身談をなして其訓育に力められ、日記や学資金、収支計算の要など実際的なものから高尚な霊的信念の涵養に尽され生徒は熱心に楽しんでそれを期待した……又其寄宿舎を度々巡視され、一々各室を叩いて生徒の様子を尋ね、生徒一同と食卓を共にして粗飯を摂り卓上演説をなさるを常とした。毎週、日を定めて面会日となして親しく生徒に接して種々の話を聞かされるので、……時の移るを知らず夜半否午前二時過迄も居残ること少くない。	 北鳴学校の生徒たち（1894年）
VI期－資料37	『北鳴学校紀事』（1895年）
和書／小谷武治旧蔵書、附属図書館北方資料室蔵	
札幌農学校予科へ入学するための進学校（中等教育機関）としての役割を果たした。稲造が教頭を務め、英語、倫理科などの授業を担当した。稲造は札幌農学校へ入学する前の少年たちへも大きな感化を及ぼしていた。	
 北鳴学校教師たち 稲造（前列左3番目）のほか、永田方正、鹿討豊太郎、大島金太郎、平野他喜松など、札幌農学校教師が兼務していた。	 北鳴学校校舎・寄宿舎 

VI期－パネル23

日本主義の青年が、聖書に出会う

伊藤 清蔵（札幌農学校第18期生）

（『南米に農牧三十年』1956年・51-52頁より）

写真／高岡熊雄関係資料、大学文書館蔵



伊藤清蔵

あの当時、三宅雪嶺、志賀重昂氏等の日本主義に共鳴して居つたから、……新渡戸先生が自宅で一週一回聖書の講釈をはじめられた時には、私も決して神の言葉の深き意味を感得せんがためにその席に列したものでなく、半ばは物好きと、半ばはキリスト教のあらさがしをして物笑ひにせんとの意地悪い「きたない」下心をさへ持つてゐたのであつた。しかし……先生の宗教尊重の態度は常住坐臥にも神を伴ふ位、真面目なるものである事を知るに及んで、私がこれ迄接した多くの人々に比し、格段の差ある高き人格であることを感じたのであつた。

VI期－資料38

高岡熊雄在学日記（1892年）

文書・写真／高岡熊雄関係資料、大学文書館蔵

第13期生高岡熊雄が本科1年級のときの日記。5月29日の項に稲造が主催する「聖書研究会」の1周年記念で寿司をご馳走になったと記載している。高岡は稲造の直系の教え子に当たり、稲造離任後は農政学などの講義を引き継いだ。



高岡熊雄

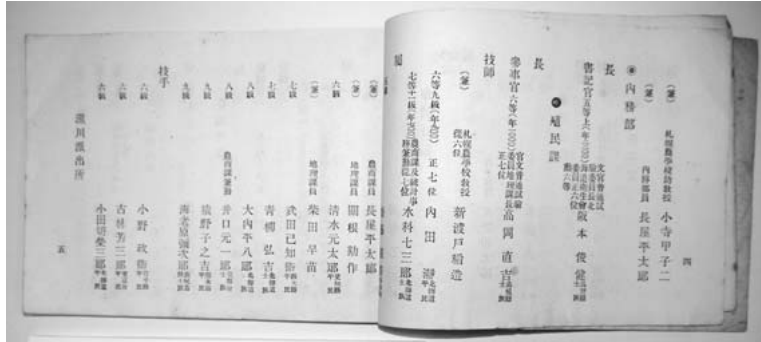
VI期－パネル24	新渡戸先生は Philanthropist! 菅 菊太郎 (札幌農学校第17期生)
(『新渡戸稲造全集』別巻・1987年・111頁より) 写真／川嶋一郎関係資料、大学文書館蔵 新渡戸先生が札幌に居られた頃、私たち当年の学生は、先生の事を「フィランソロピスト」などと綽名して、之を愛の教育者ロバート・オーエンなどに擬して居たものである。蓋し先生の提唱に成った当年の札幌夜学校のお世話なども其の一例であるが、また苦学生に夜学校の世話をさせて学資の援助を与へた事や、其他一般の不具廃疾者のお世話、病人や下層階級の人々に対して少からず同情を寄せた事、殊に直接先生の物資上のお世話を受けて臈ては成功した貧書生も多い。  遠友夜学校教師と生徒 (1905年6月)	
VI期－資料39	遠友夜学校に熱心な農学校生たち (1900年) 文書／札幌農学校簿書696、大学文書館蔵
遠友夜学校は学校に通えない子どもたちに教育を授けるために新渡戸稲造・メアリー夫妻が設立した学校。札幌農学校生も教師として熱心に活動し、寄宿舎の門限に遅れること度々であった。蠣崎知二郎、半澤洵らは稲造の札幌の最後の教え子たち。 	

VI期一資料40

『北海道庁職員録』（1897年1月16日）

刊行物／宮部金吾旧蔵書、大学文書館蔵
写真／ブリガム003、附属図書館北方資料室蔵

稲造は北海道庁内務部殖民課技師を兼任していた。上司の殖民課長高岡直吉、同僚の技師内田澁も札幌農学校出身。



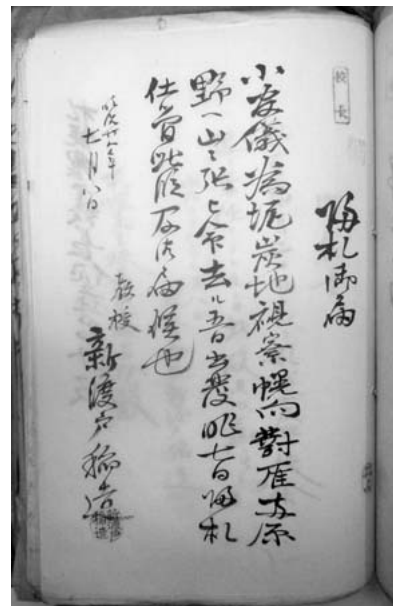
北海道庁庁舎（1889年頃）

VI期一資料41

幌向・対雁泥炭地視察出張届（1895年7月）

文書／札幌農学校簿書504、大学文書館蔵

北海道庁技師も兼任していた稲造は、道内殖民地の調査を行なった。多忙を極めた稲造は体調を崩し転地療養をしたが、その合間を縫うようにさらに出張へ出かけた。石狩地方の泥炭地を土地改良して、農地化し、殖民を進めることが、北海道庁の大きな課題であった。



VI期一資料42

受持授業の軽減依頼 (1894年1月9日)

文書／札幌農学校簿書493、大学文書館蔵

北海道庁技師の兼任や各種の活動に加え、週20時間の授業は非常な負担であった。稲造は農業史、農政学またはドイツ語の授業時間を減らすよう依頼している。予科英語ではなく、専門の農業史・農政学の軽減を求めている点に、稲造の志向が表われている。



VII. 札幌へのメッセージ

VII期一パネル25

札幌農学校第15期生卒業記念 (1897年7月)

写真／宮部金吾旧蔵写真0474-11、植物園蔵

札幌農学校の存続に奔走していた佐藤昌介校長（前列中央）や、兼務多忙な新渡戸稲造教授（前列左2番目）の顔は、憔悴した表情に見える。

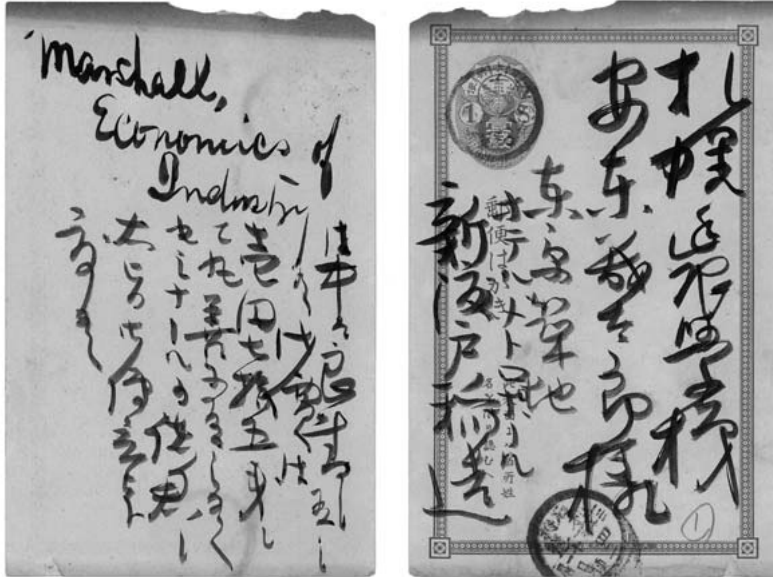


Ⅶ期一資料43

母校学生へのアドバイス（1897年11月4日付、安東幾三郎宛て書簡）

書簡／宮部金吾旧蔵書簡〔安東001〕、大学文書館蔵

札幌を離れてからも、稲造と札幌農学校生との交流は続いた。農業経済学専攻の安東幾三郎（後に義喬）宛てには、「Marshall, Economics of Industry は中々良書……セミナールの諸君に大旨御伝え下被度く候」と、専門的なアドバイスをしている。



Ⅶ期一パネル26

札幌農学校予科卒業記念（1897年）

写真／星野勇三関係資料、大学文書館蔵

後の第19期生たちと共に（2列目左2番目）。第19期生からは、有島武郎（小説家）、森本厚吉（消費経済学者）、星野勇三（園芸学者）、半澤洵（応用菌学者）など多才な人材が輩出された。

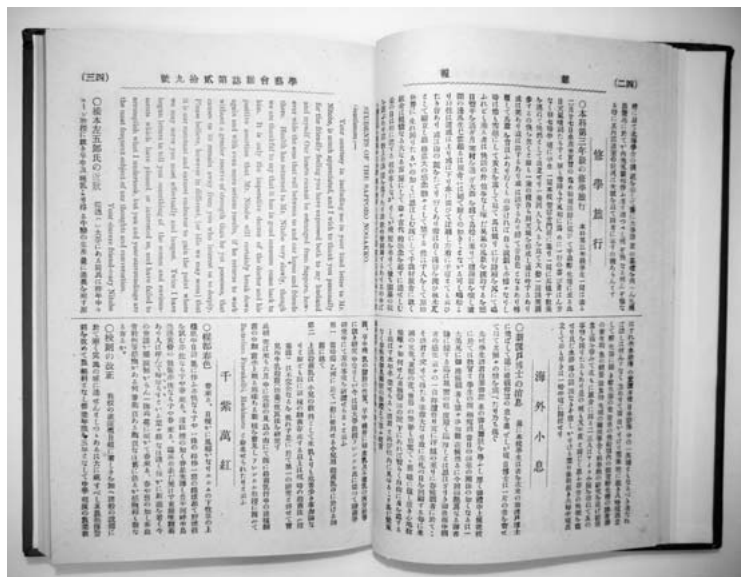


Ⅶ期一資料44

札幌農学校生への謝辞 (1899年6月8日)

刊行物／『学藝会雑誌』第29号、大学文書館蔵

札幌農学校を離任しアメリカに滞在していた稲造に、農学校生が稲造から大きな感化を受けた旨、書簡を送った。稲造は、「拙者に於てこそ諸君と交りて得たる事偉大なり」、「在札の日を回顧する毎に米国の文化、東都の花、世俗の榮譽も皆棄て、旧職に復し度き心地致候」と返信している。



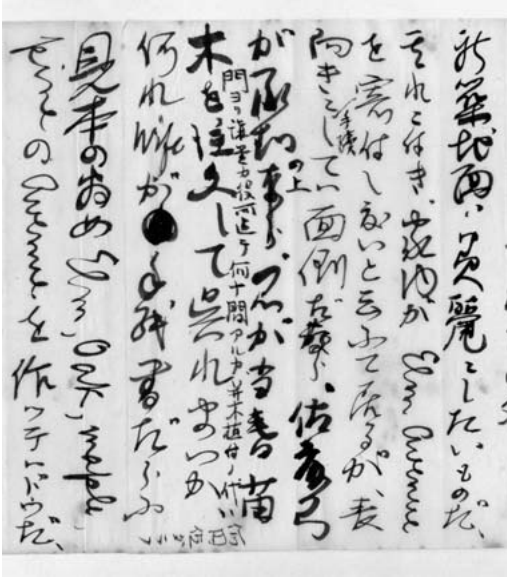
Ⅶ期一パネル27

東北帝国大学農科大学 (1911年頃)

写真／125-016、大学文書館蔵

1907年9月、札幌農学校は大学に昇格し、東北帝国大学農科大学となった。キャンパスは北1条から、現在の北8条へと移転した。



Ⅶ期－資料45	エルム並木の寄付申し出（1899年1月30日付、宮部金吾宛て書簡）
書簡／宮部金吾旧蔵書簡〔新渡戸032〕、大学文書館蔵	
在職中に苦心してきたキャンパスの新築・移転が決まり、「万歳々々」と喜ぶと共に、「新築、地面ハ貴麗ニしたいものだ、其れニ付き、家内が Elm Avenue を寄付し度いと云ふて居る……苗木を注文して呉れまいか、[門ヨリ講堂カ役所迄テ何十間アルカ、並木植付ノ代ハ何円位ダラフ] 何れ wife が手紙書だらふ、見本の為め Elm, Oak, Maple, Pine の Avenue を作ツテハドウだ」と、北8条キャンパスにエルム並木を寄付したいと申し出ている。	
Ⅶ期－資料46	離任10年後の来学講演（1909年6月12日）
刊行物／『文武会々報』第58号、大学文書館蔵	
札幌農学校を離任して10年後、稲造は農学校で講演を行なった。札幌での学生時代を回顧し、札幌の「アトモスフエヤ（atmosphere：空気）がよかったのだ」と述べ、農学校生に対し「札幌の伸びへしたアトモスフエヤを吸って北海道の天然の豊なところを利用し、諸君が伸びへと発達せられんことを希望する」とメッセージを送った。	
	

Ⅶ期－パネル28 来学講演を行なった来札時の中島公園岡田花園における記念撮影 (1909年6月)

写真／高松正信旧蔵写真0198、大学文書館蔵

後ろから2列目右から7番目が新渡戸稲造、11番目がメアリー夫人。ほかに佐藤昌介、宮部金吾、南鷹次郎といった元同僚や、高岡熊雄、有島武郎、森本厚吉といった教え子の顔が見られる。



Ⅶ期－パネル29 「鬼の糞研究会」(サータ・レザータス研究会)の記念撮影 (1907年5月25日)

写真／高松正信旧蔵写真0197、大学文書館蔵

稲造離任後も、愛弟子森本厚吉(前から2列目右から5番目)を中心に彼に強い感化を受けた農学校生たちがT.カーライル『サータ・レザータス』の研究会を引き継ぎ、盛会であった。森本助教授の渡米を記念して恵迪寮前で撮影したもの。



Ⅶ期－パネル30	学問は、心の Emancipation! 新渡戸 稲造（札幌農学校第2期生・教授） （『内観外望』・1933年・815頁より） 写真／高岡熊雄関係資料、大学文書館蔵
	〔札幌農学校では〕実際は、農学などは一週間に三時間か四時間位のもので、他は哲学とか、文学とかわけのわからないやうなものを習ったものである。かやうに、私はやゝ技術に傾くやうな学校にをつたけれども、一度学問をすれば、心のエマンシペーション、即ち心の解放といふよりは、むしろ啓蒙といふ方がよいと思ふが、心のエマンシペーションを受け、また自由な、リベラライズされる精神を植ゑつけられた。……この心をリベラライズするといふこと、エマンシペートすることが、私は学問の第一の目的だと信ずる。  新渡戸稲造 （ベルリンにて、1907年）